

中世世界システムとグローバル・ヒストリー

Medieval World System and Global History

プロジェクト期間：平成23年度～平成27年度

本研究課題は二つの基軸を有している。それらは表題にある「世界システム」と「グローバル・ヒストリー」という二つのテクニカル・タームで表現されている。「世界システム」という概念は、もともと15世紀後半以後のヨーロッパ先進国の近代的な不均等発展をベースに、近代的覇権システムを支えるべく生成された、優れた近代的な地域間統合システムとみなされている。だが「世界システム」は元来近代に固有な歴史的事象とは言えない。近代を遥かに遡る時代から、近代システムとは別種の「世界」システムが機能していた。例えばローマ帝国が最盛期にあった西暦1、2世紀の交易活動は、ローマを基軸にした地中海交易が、紅海、インド洋、南シナ海、東シナ海といったそれぞれ分節化されていた交易とリンクし、漢帝国を東の端とする交易ネットワークとして機能し、漢からは陸地を経て、ウイグル、チベット、パルティア帝国、パルミラ、東地中海海港都市へと通ずるいわゆるシルクロードがもう一つの経路を構成する東西交渉機構の存在が想起される。確かにこの時代には、新大陸は孤立した世界で、他には知られずもっぱら旧世界を枠組みとするシステムではあったが、こうした空間的な限界性は、「世界システム」という用語を用いるに際して大きな障害にはならない。なぜなら、新世界を欠いてはいるが、旧世界の人類の生存条件はそのようなものとして現前し、そうした所与の空間性のなかで、諸文明を連結するシステムを構築していたからである。このような複数の文明の連なりを一体のものとして律動させたそれぞれの時代的条件、「文化の興亡」の条件を明らかにしてくれる。そのような意味で近代以前に「世界システム」を云々することは、何らアナクロニズムではないし、19世紀に起こった社会進化論が、往々にして胚胎させがちな、知的に自由な歴史的展望のための阻害要因を無化する上で重要な、発想上の転換となる。

グローバル・ヒストリーに関する最新の概論『グローバル・ヒストリーとは何か』（2008年）を著わしたバメラ・カイル・クロスリーは、次のように述べている。「事実を発見し、史料により掘り起こされた歴史を結びつけるといった第一次的作業は、グローバル・ヒストリーを実践する歴史家の仕事ではない。彼等はむしろ他の歴史家たちが行った研究に拠りながら、比較を行い、概括的なパターンを記述し、人類史すべての本質と意味を解き明かす変化を理解する筋道を提案するのである」と指摘し、それが歴史学というよりは歴史社会学に属することを強調している。グローバル・ヒストリーが指向する学問的目的は、文明

史的な指向を具えた本プロジェクトに極めて適合的であることは、容易に理解できよう。

発想の面で社会進化論の宿痼を克服し、方法論的には歴史社会学の方法に学び巨視的な視点で、近代以前の諸文明間を連貫する共時的なシステム律動を捉えることが、本プロジェクトの目的である。

すでに触れたように、旧来の歴史観は余りに社会進化的パースペクティブに囚われていた感があり、近代以前の人間の知的営為を低く評価し、その社会的達成を評価する認識論的な視座を欠落させていた。それは多かれ少なかれ、欧米を始めとする諸外国の学問世界にも共通する欠落である。日本における以上に海外の歴史研究は、対象時代が古くなればなるほど、視野は地域、あるいはせいぜい近代に形成された国単位であり、これを超えた文明圏もしくは間文明圏的な広がりを持たなかった。本プロジェクトは、近代以前の諸文明圏を単一の实体ではなく、それら相互を結びつけて一つのシステムと捉えて、そのような所与のシステムが他の時代のシステムとどのように異なり、その差異は何に由来するかを問おうとする点にある。

こうした方法的発想に根ざした研究は、いまだ限られており、国際的にインパクトを有することは論をまたない。先述したグローバル・ヒストリーの考えが定着するに連れて、言わば世界システム論のもつ学問的、知的可能性についても認識が深まるに違いない。この課題についての研究技術上の特性は、共同研究という点にある。古今の世界中の文明に通暁することは、ひとりの学者の知的勢力を遥かに超える。それぞれの文明に通暁した内外の個性的な研究者の共同での作業が必須のものとなる。当初は限られた若手研究者を協力者として、申請者が専門にしているポスト・ローマ時代の西欧文明圏、および隣接するビザンティン、ペルシャまでの近東文明圏のシステム連関の解明を課題として設定し、順次、インド、中国と共時的連関を探索する予定である。

ポール・サミュエルソンの『文明の衝突』が、わが国でも大きな反響を呼び、文明研究の必要が声高に叫ばれながら、学術的根拠を具え、明瞭な展望を持った文明研究が提示されなかったのは、「文明」という極度に抽象化された概念にアプローチするための有効な方法が見いだせなかった点に、その大きな原因がある。その有効な「切り口」となるのが、申請者によればシステム論的アプローチである。或る文明が減じ、ある文明が新たに起こるのは、個々の文明に内在する価値要因

佐藤 彰一

SATO Shoichi

高等研究院アカデミー会員、大学院文学
研究科特任教授、日本学士院会員、フ
ランス学士院連携会員



というより、所与の時代における各文明が担ったシステム連関上の役割によるところが大きい。とすればそれぞれのシステム連関の歴史的、時代的個性に内在する理論と指向性を解明することによって、その連関の中にある個々の文明の適応性と、非適応性を評価することができる。

申請者は2008年に『中世世界とは何か』（岩波書店）と題する著書を上梓した。その序論において、「中世を切り出す」と題して、いわば「ヨーロッパ中世」という世界を文明圏として位置づける作業を行ったが、それはむしろ専門の歴史研究者に属さない、だが現在われわれが生きている時代の歴史的位相がいかなるものかについての切実な問いかけを行っている識者や、経営者から肯定的な評価を得ることができた。申請者は歴史家であり、歴史学の目的と方法への愛着は人後に落ちないと自負している。それゆえ史料研究に基づく歴史研究は今後も継続するが、同時にそうした成果をさらに巨視的なレベルで文明論的に問い直す作業もこれと並行して実践したいという強い願望を持っている。

さらに最近では「ポスト・ローマ期ヨーロッパにおけるシリア人およびシリア問題」と題する論考を完成させた。そこでは4世紀から繁栄を極めたシリア地方がなぜ7世紀に経済的に急速に衰退したかを議論したが、それはオリーブ油生産が全地中海の需要を掘り起こし、労働力需要が高まり、急速な人口成長を実現したものの、これがマルサスの危機を呼び覚まし、何よりも当時の技術水準の条件のもとで、生産力が頭打ちとなり、脱出不可能な袋小路に入り込んでしまったと論じた。北シリア台地に累々とその屍を曝す当時の豪華な石造りの農民家屋は、フランスのシリア史の専門家ジョルジュ・タトによれば、それはブレイクスルーの技術を持たなかった、豊かな富の果実を家の建築に過剰投資せざるを得なかった7世紀シリア社会の文明条件を表象していたのである。



背景：麒麟（名古屋大学レクチャーシップ表彰楯のモチーフ）、西 大記、2006

麒麟は、古来の想像上の瑞獣で知恵の象徴でもあり、最も傑出した人物を表すものとされてきました。麒麟の出現は、聖人が現れ、平和で学問が尊重される世の中になる前兆であるといえられてきました。画家の西氏によれば、今こそ麒麟が出現し、世界が平和になり、学問が発展するように、との祈りを込めて制作したとのことでした。

プロフィール

- 1969年 早稲田大学文学研究科修士課程（西洋史専修）入学
- 1969年 フランス共和国カン大学人文学部留学
- 1971年 早稲田大学文学研究科復学
- 1973年 早稲田大学文学研究科博士課程（西洋史専修）入学
- 1976年 早稲田大学文学研究科博士課程単位取得
- 1978年 日本学術振興会奨励研究員
- 1979年 愛知大学法経学部助教授
- 1984年 バリ第10大学客員研究員
- 1987年 名古屋大学文学部助教授
- 1991年 名古屋大学文学部教授
- 2009年～ 名古屋大学大学院文学研究科特任教授

受賞歴

- 2001年 エク・サン・プロヴァンス大学客員教授
バリ社会科学高等研究院(EHESS)客員教授
コレージ・ド・フランス招聘教授
- 2002年 日本学士院賞
- 2003年 プリンストン大学歴史学部招聘講演
- 2004年 バリ第1大学招聘教授
- 2005年 バリ第4大学ハビリテーション(教授資格)審査会委員

代表的研究業績

1. 佐藤彰一、『修道院と農民 一会計文書から見た中世形成期ロワール地方一』、名古屋大学出版会、1997年（2002年度日本学士院賞受賞）
2. 佐藤彰一、『ポスト・ローマ期フランス史の研究』、岩波書店、2002年
3. 佐藤彰一、『歴史書を読む 一『歴史十書』のテキスト学一』、山川出版社、2004年
4. 佐藤彰一、『中世初期フランス地域史の研究』、岩波書店、2004年
5. 佐藤彰一、『中世世界とは何か』、岩波書店、2008年